

テーマ：本願

『教行信証』真仮8願

行巻	諸仏称名の願（第17願）
信巻	至心信樂の願（第18願）
証巻	必至滅度の願（第11願） 還相回向の願（第22願）
真仏土巻	光明無量の願（第12願） 寿命無量の願（第13願）
化身土巻	至心発願の願（第19願） 至心回向の願（第20願）

愚禿積親鸞の名告り

総序	「愚禿積の親鸞」	聖典150頁
信巻別序	「愚禿積の親鸞」	聖典210頁
信巻真仏弟子積	「愚禿鸞」	聖典251頁
化身土巻三願転入文	「愚禿積の鸞」	聖典356頁
化身土巻後序	「愚禿積の鸞」	聖典399頁

総序と信巻別序では、大乘仏教の責任を果たしたいと正式な名告り。

化身土巻三願転入文と化身土巻後序では、凡夫の目覚めを明確にされた曇鸞の鸞の字。

信巻真仏弟子積では、仏弟子を表す「積」の字なく、凡夫の悲嘆。自らは仏弟子を名告る資格はないが、他力の信心の人を「わが親友ぞと教主世尊はほめたもう」（聖典505頁）という思いが。

三願転入

第18願 たとい我、仏を得んに、十方衆生、心を致し信樂して我が国に生まれんと欲（おも）うて、乃至十念せん。もし生まれずは、正覚を取らじ。唯五逆と正法を誹謗せんをば除く。

第19願 たとい我、仏を得んに、十方衆生、菩提心発（おこ）し、～～～

第20願 たとい我、仏を得んに、十方衆生、我が名号を聞きて、～～～果遂せずんば、正覚を取らじ。

ここをもって、愚禿釈の鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化に依って、久しく万行・諸善の仮門を出でて、永く双樹林下の往生を離る。～～～速やかに難思往生の心を離れて、難思議往生を遂げんと欲（おも）う。果遂の誓い、まことに由（ゆえ）あるかな。（聖典356頁）

至心発願欲生と 十方衆生を方便し、～～

至心回向欲生と 十方衆生を方便し、～～

定散自力の称名は 果遂の誓いに帰してこそ

おしえざれども自然に 真如の門に転入する 浄土和讃、聖典484頁

「論主の解義」とは、天親菩薩の「世尊我一心」

「宗師の勸化」とは、善導大師の「至誠心、深心、回向発願心」（『観経』三心（さんじん））

第19願をあらわす『観経』、第20願をあらわす『阿弥陀経』、この2つの経典、2つの願がどのような意味をもっているかが分かってきた。仏教の歴史、自力から他力への歩みの開頭。第18願というのは、浄土の真実をあらわそうとする根本の願であるが、仏教の歴史の表にはあらわれず、第19・20願の自力の仏道の背後に流れていた。それを「浄土の真宗」と名づけられた。三願転入は、個人の体験ではなく、仏教史観。それゆえ、「化身土巻」における教化される身としてあらわされている。

小乗仏教から大乘仏教へ、『法華経』から『無量寿経』へと、二度の行き詰まりを越えて、明らかになってきた。個人主義とエリート仏教。（仲野良俊先生）

如来のはたらきに気づく信 = 他力の信

如来を信じていこうとする信 = 自力の信

「至誠心、深心、回向発願心」、三心は仏弟子の必須条件。

しかし、「虚仮雑毒の善をもって浄土に生まれんと願うことは、必ず不可なり」（信楽釈、聖典228頁）

三往生 双樹林下往生 釈尊の如く仏道を完成したい。環境が整っている国に生まれて、仏道を完成したい。来迎思想。『観経』には、来迎してくる如来が説かれ、悪人が助かる思想が説かれた。はからい続ける者が人間であり、はからうこと、疑うことのほか知らない者としての人間の限界を示す。ようやく、仏法というのは、目覚めることであると気づかされる。我々は、百万年生きても娑婆の中、一千万年生きても罪幅信のとらわれの中。

「雑行を捨てて本願に帰す。」人間が人間自身に目覚めるために、弥陀の本願ということが不可欠であった。目覚めの信の確立がうながされている。

三願的証

第 1 1 願 必至滅度の願

第 1 8 願 至心信樂の願

第 2 2 願 還相回向の願

凡夫が速（すみ）やかに涅槃の覺りを得る道に立つのは、この 3 つの願による。

第 1 1 願 浄土に生まれた衆生が、正定聚の位に立って、必ず涅槃の覺りを得る者になることが誓われている願。

第 1 8 願 必至滅度（第 1 1 願）の内容が、凡夫の他力の信心に実現されるようにと誓われた願。

以上の 2 つの願は、如来の自利。それを実現して如来になろうとする。

第 2 2 願 利他の願。一切衆生に涅槃の覺りを普賢菩薩の教化として届けたいという利他の願。師による教化によって道に立たされる。如来の自利利他の 3 願によって、衆生の仏道が完成する。

他力の信心（第 1 8 願）によって涅槃への道（第 1 1 願）が確立し、その道は、浄土から還相した善知識の教え（第 2 2 願）によって貫徹される。凡夫の大般涅槃道の的（たし）かな証拠とされる。（「浄土論註下巻末」

現生正定聚

『大經』下巻には、最初に、第 1 1 願成就文が説かれている。

それ衆生ありてかの国に生ずれば、みなことごとく正定聚に住す。所以（ゆえ）はいかん。かの仏国のなかには、もろもろの邪聚および不定聚なければなり。（聖典 4 4 頁）

「正定聚」は、「かの国に生ずれば」とあり、浄土に生まれてからの位。しかしながら、宗祖は、「生彼国者」を「生まれんとする者」と読み替えられている。

「それ衆生あって、かの国に生まれんとする者は、みなことごとく正定の聚に住す。～～正定聚のくらいに定まるを不退転に住すとはのたまえるなり。」（『一念多念文意』聖典 5 3 6 頁）

次に、第 1 7 願・第 1 8 願成就文が説かれる。

あらゆる衆生、その名号を聞いて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。心（しん）を至し回向したまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得、不退転に住せん。ただ、五逆と誹謗正法とをば除く。

如来回向の他力の信心であることが明かされている。

曇鸞大師『浄土論註』上巻末に「八番問答」が説かれ、唯徐されている「五逆誹謗正法」の凡夫が救われていく道を、大乘菩薩道として、初めて明らかにされた。